

---

# プレリュード 『王子と姫の出会い』

りんか

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

プレリユード 『王子と姫の出会い』

### 【Nコード】

N5465P

### 【作者名】

りんか

### 【あらすじ】

少年は、父王から偶然貰った封書を開いた瞬間。そして少女は、逆光に照らされた後姿を目にした瞬間。隣国同士の王子と姫の出会い、とても衝撃的なものだった。※甘々で、糖度高めの短いお話です。

## きっかけ（前書き）

一年以上前の作品になります。  
稚拙さには、目を瞑ってやってくださーい！

## きっかけ

「そういえば——……」

腕の中の愛しい人の翠髪に埋めていた顔を上げながら。

アレスは、ふと思い出したように呟いた。

「どうかされましたか、アレス様」

彼の言葉に反応し、それまで彼に身を委ね夢心地で瞳を閉じていたディアナは、ゆるゆるとその美しいエメラルドを覗かせ、彼を上目遣いに見上げるとそう尋ねた。

すると彼は、彼女の腰に回した手とは反対の手で、金色に輝く前髪をかきあげた。

——それは彼女だけが知る、照れ隠しをする時の彼の癖。

その様子を見て、ディアナは思わず破顔した。あの頃から全然変わらな……。

あの時、初めて会った瞬間心を奪われてしまったあなたと——。

十年以上前の穏やかに晴れた、とある日。

静かだが、威厳のあるよく聞き知った声音に名前を呼ばれ、少年はゆっくりと顔を向けた。その表情が予想通りの人物を捉え、パッと輝く。

「父上、お帰りになっていたのですか」

「ああ、今しがたな」

「視察は、どうでしたか？」

「視察も何も、あの国には何度も足を運ばされているからな、特にこれといった変わり様はなかった。が、道中の魔物の数が増加したような気がする。警備を強化する必要があるな」

そう言いながら、父親に手渡される一通の封書。

少年は受け取りながら、小首を傾げた。

「父上、これは？」

「視察用の案内書みたいなものだ。ご丁寧に、こんなものまで用意してくれていてな。悪いが、すぐにまた出なければならぬ。処分しておいてくれるか？」

「わかりました。気をつけて、父上」

「留守を頼むぞ」

「はい」

去り行く大きな背中を見送り終えると、少年は手の中の封書へと視線を落とした。

（用済みなら、どうしようがオレの勝手だよな？）

十本の指先が、器用に封を解いていく。

広げた瞬間、瞳に飛び込んできた、鮮烈で美しい翠の色合い。それに、少年は雷に打たれたような強い衝撃を受け、呆然とその場に立ち尽くしてしまった。

それが、彼にとってのきっかけ――。

「キャアアアア――ッ！」

侍女の叫び声が、馬車の中で座り込んでいた少女の耳を掠めた。

ついで響き渡る不快な音から少しでも距離をおきたい、と目を閉じ耳を両手で塞ぐけれど、否応なしに流れ込んでくる阿鼻叫喚。

（や、いや……っ）

九歳になったばかりの彼女にとって、それはあまりにも惨たらしい現実だった。

ガチャッ！ ふいに馬車の扉が外側に開かれた。少女の両肩がビクリと震え、潤んだ翠の瞳に恐怖という名の翳りが差し込む。おびえた表情が、だが歓喜へと変わった。

彼女の視界に飛び込んできたのは、見知った白銀の鎧。慌ててそちらへ駆け寄ろうと腰を浮かすが、鉛のように身体は動かなかった。正直、恐怖に苛まれた全身からは力が抜けてしまっていて、立ち上

がることも不可能だった。

ふと、視界に紅色が飛び込んでくる。それは白銀から流れる、鮮やかな――。

（怪我をして……！ 回復、回復の魔法を……！）

彼女の唇が震えながら、薄く開かれる。

会得したばかりの魔法を発動しようとするが、混乱が、焦燥が、普段の冷静さを全て奪っていく。――何も、思い出せない。

「お逃げ、ください。姫……！」

苦悶の声がそう告げる。少女はかぶりを振りながら、たどたどしい口調で魔法を紡いでいく――が。ズルリ……白銀の鎧が視界から滑り落ちた。

「っ」

衝撃が、彼女を襲う。それに伴い、霧散していく治癒の魔法。

代わりに残されたのは、開かれたままの馬車の扉から覗く爛々と光る何対もの瞳と、キヒツキヒツ――耳障りな声の合唱たち。

「あ、ああ……」

再び訪れた絶望が、ゆっくりとだが確実に彼女を包む――。

と、その時。

ギャアアアアア――ッ！ 響いてきたのは、断末魔の叫び。

一度ではない、次々と上がるそれに少女は一瞬、何が起きたか理解できなかった。

不意に――静寂が落ちた。

ふと気がつけば、馬車の扉から覗いていた炯眼はどこにも無く、静かな森の緑だけがそこに広がっていた。

恐怖に凍り付いていた身体が、ようやく動く。扉に這い寄ると震える手を扉の淵にかけ、恐る恐る外を確認する。彼女の翠目が、みるみるうちにその大きさを増した。

累々と横たわる魔物の群れの中に一人、少年が佇んでいた。抜き身の剣を手に、こちらに背を向けたまま。

「あれは……？」

逆光に照らされたその黒いシルエットは、そんなに大きいわけでもないのにとっても頼もしく思えて、少女は不謹慎にも頬が紅潮するのを感じた。

と、彼が駆け出した。同時に舞い上がる紅の外套。走りながら彼は、流れるような手さばきで剣を鞘へと戻すと、速度を上げる。

――すぐさま彼の姿は、視界から消えてしまったけれど。

少女の翠の双眸には、鮮やかに残っていた。彼が走り出したとき、一瞬だが逆光の照射角度が変わり彼の本来の姿を映し出した――その、輝くような金の髪を。

それが、彼女にとってのきっかけ――。

## お約束

少女が自分の国にようやく辿りついた頃には、昇りかけだったと記憶していたはずの太陽が、いつの間にか中天を過ぎ、じりじりとその熱を発散している時分だった。

この国レファンダムの王城へと向かう馬車の中で、彼女は帰国と同時に乗車してきた馴染みのある侍女から伝えられた言葉に、不思議そうに瞳を瞬かせた。

「お客様、ですか？」

「はい。お疲れだとは思いますが、何分お相手が――」

口ごもる侍女に、少女は構いませんから、と続きを促す。

「……メゼンティアの第一王子、アレス殿下でございます」

「アレス、殿下？」

メゼンティア。レファンダムの隣に位置する、天然の要塞を誇る強固な国。

王同士が旧友の間柄ということもあり、友好的な関係を保っている隣国の名前だった。

「はい。来訪予定の書簡も前もってなく、突然のご訪問で私達も戸惑っています」

「そうですか……。殿下のご用件は、伺いましたか？」

「それが、“レファンダムとの友好を更に築きたい”とおっしゃるばかりなのです」

「友好を？　メゼンティアとは、今でも十分な交流や貿易を行っているのではないですか？」

「ええ。ですから、私達にも殿下の真意が掴めなくて困り果てていたのです。そんなときに姫様が魔物に襲撃された、という急報が入り城内は更に混乱を増してしまっ――」

「そうでしたか……。あなた達には、申し訳ないことをしてしまっただようですね」



「そんな……！ ディアナ姫様がご無事だっただけで、私は……！」  
「ですが、私のために護衛の騎士が命を落としました……。家族の方に、なんてお詫びをすればよいのか……」

「姫様を護りきってくださったのですから、その騎士様は立派にお勤めを果たされたのですね。とても——榮譽のある方だと思います」  
「……そう、ですね」

物心ついた頃からずっとつき従ってくれている侍女の手を取り、小さく祈りの言葉を呟くと、少女——ディアナはぎこちなく微笑んだ。

「とりあえず、お会いしてみます。そのメゼンティアのアレス殿下に……」

アレス殿下。どんな方だろう。

隣国メゼンティアの第一王子。隣国とはいえ、まだ一度もお会いしたことはない。

どんな容姿で、どんな性格で、どんな声で、どんな仕草で、どんな話を好まれるのでしょうか？ お茶？ 書物？ それとも、やはり政治？

きっと素敵な方——そう、あの時の少年のように。

「あ……」

ディアナは、足を止めた。城内のある一角、先ほど王城へと戻ってきた彼女は、身支度を済ませ、客人が待つと思われる大広間へと歩を進めていた。

また——あの少年のことを無意識に思い出していたようだ。頬が、無意識に熱を帯びる。もう一度、あの少年に会えたら——と思うけれど。

ぼんやりとそう耽りながら、ディアナは道なりに角を曲がった。

——刹那。

「うわ、っと！」

ドンッ！ 突然の衝撃に、小さな悲鳴が零れ落ち、彼女は一瞬にして平衡感覚を失った。

思わず、両目が閉じられる。瞬間、彼女の手首がしっかりと握られ、引き寄せられる。待ち受けていたのは、細いけれど力強い二本の腕。

「ご、ごめん！ ちょっと考え事をしてたから……え？ 君は……！」

声がする。まだ幼い、だけど芯の通った、澁刺とした声音。

ディアナは、ゆっくりと目を開けた。——真っ先に飛び込んできたのは、金色に煌く光。

焦点が合うにつれ、それが彼の髪色で瞳の色だとわかる。

「あなたは……！」

驚愕の声が漏れ落ちた。

あの時、あの場所で見た、あの少年の風貌にそっくりの彼が、目の前にいる——！ 金色の髪、白を貴重とした衣服、そして目に鮮やかな真紅の外套。

彼はニコツと微笑むと、彼女を立たせ、その手を取りそっと口付けを落とす。

「あ……と。オレはアレス。隣国メゼンティアから来たんだ」

「アレス殿下……。あなたが……」

「君はディアナ王女、だよな？」

「は、はい。申し遅れました。私、レファンダム王国第一王女のディアナ・ベルラート・レファンダムと申します。お見知りおきください、殿下」

そう言っただけ彼女は、着込んでいる礼装の一部分を摘まみ、スカートを広げるような仕草と共に優雅にお辞儀をする。

「ああ、うん」

アレスは口元に苦い笑みを浮かべながら、小さく頷く。

「殿下、あの、失礼を承知で一つ、お訊きしてもいいですか？」

「――それ、止めようぜ？」

「えっ……？」

不思議そうに、小首を傾げるディアナ。“それ”の意味が、よくわからない。

一呼吸置いてアレスは腕組みをすると、片脚に体重をかけながら口を開いた。

「その“殿下”ってやつ。“アレス”でいいよ」

「ええ……っ」

頓狂な声が少女から漏れた。そんな、呼べるわけがない……！と彼女は戸惑う。

「ほら、呼んでみて」

「そんな……、無理です」

「いいから」

困惑しながら、落ち着かない翠眼が宙を泳ぐ。

ゆっくりと――音が紡がれた。

「あ、え……。ア、アレス……さま」

ようやく、彼の名前が彼女の声で紡がれる。余計なおマケもついていたけれど。

そんな彼女を見て、アレスは可笑しそうに頬を緩ませた。

「ぷっ。なんだよ、それ。あまり変わらなくないか？ まあいいけど」

「す、すみません……」

真っ赤に染まった顔で、ディアナは下を向いてしまう。

初めて、だった。侍女でも自国の騎士でも何でもない、自分と同じくらいの少年の名前を発したのは――。

「なあ」

「は、はい！」

急に話しかけられ、ディアナの返事は上ずってしまう。

「そんなに固くなるなって。思った以上に、堅物なんだな」

「なっ……!」

思わず顔を上げてしまうディアナ。

すぐさま、面白そうに煌く金色の瞳と交錯した。

「やっど、こっちを見た」

「あ……」

「……絵で見るより、実物の方がやっぱりいいな」  
ポツリ、と呟かれるアレスの言葉。

「え？」

「いや、こっちの話。そうだ!　なあ、今からオレの秘密の場所に連れてってやるよ」

クシャリ、前髪をかきあげながら、アレスが言う。

「私を、ですか？」

「他に誰がいるんだよ」

「私でよろしいのですか？」

「ディアナじゃないと駄目だ」

「ですが、お父様にお許しを頂かないと……」

元々、産まれた頃から身体の弱い彼女は、数えるほどしか外出をしたことがなかった。今回も、静養のために近くの別荘へ足を運んでただけで、彼女の外出といえばそこ城の行き来くらいだった。懂れていた、外の世界に。でも――。

胸の前で両手を組み、首を振るディアナをアレスはきょとんとした表情で見つめていたが、やおら微笑むと彼女の手を嬉しそうに取る。

「じゃ、決まりな」

アレスの返事に、ディアナは驚きの眼差しで彼を見た。

「わ、私、まだご一緒に行くなんて一言も……」

「なに言ってるんだよ。おまえ、ウソつくの下手すぎなんだって」

「え……」

「ほら、行こう」

グイッ、アレスはディアナの手を引っ張り引き寄せると、そのま

ま駆け出した。

つられて彼女も走り出すが、慌てて彼へと問いかける。

「ど、どこに行くのですか？」

「だから、オレの秘密の場所だってば！」

「だ、駄目です、私は……！　で、殿下！　手を放し……っ」

「ア、レ、ス！」

「……アレスさま……！」

「やっだよ。誰が放すもんか」

クスクス、笑いながら更に強く引くアレスと、困ったような嬉しそうな複雑な表情のディアナ。

そのまま二人は、衛兵が止めるのも聴かず城の外へと飛び出して行った。

## 変わらないもの

「……どうしたんだ？」

その優しい声に、ディアナははっと我に返った。

そちらの方へ視線を向け——黄金の瞳に遭遇する。

記憶の中の少年が、目の前のアレスに重なった。

「い、いえ、何でもありません……」

頬が熱くなるのを自覚しながら、彼女は彼から顔を逸らすと、胸の前で手を組み小さくかぶりを振った。

それを見たアレスは僅かに眉を上げ驚いたような表情を浮かべたが、すぐにそれを綻ばせる。

「ふっ。それ——」

「え？」

「嘘をつく時のお前の癖。——変わらないな、あの頃と」

「あ……」

懐かしむような彼のその物言いに、ディアナは目を見張った。

同じことを思い出していたなんて——。気恥ずかしくなって、彼女は俯いてしまう。

そんな彼女を横目にしながら、アレスは笑いながら腕を組む。

「初めて会った時のおまえ、凄い堅物でさ、どう接しようかちょっと困ったんだぞ」

「か、堅物……ですか？　そ、そうおっしゃるアレス様も、王族としては型破りな方だと思いましたが……」

普段の彼女からは想像できないようなその言い方に、アレスは更に笑みを濃くすると彼女のほっそりとした顎を捉えた。

ほんのりと紅潮し、こちらを見つめてくる彼女が限りなく愛しい。

「——言ったな？」

そう彼女の耳元に呟いて、そのままそこに口付ける。

頬に顎に、そして唇に掠めるような甘い刻印。

「そういえば、ディアナ。あの時、俺に何か訊こうとはしていないかったか？」

「あ、はい。あの、アレス様」  
「なんだ？」

「私たちが初めて会ったあの時——レファンダムにいらっしやる途中で、魔物に囲まれた馬車を、ご覧になりましたか？」

「魔物に囲まれた、馬車？ あゝ……と。そういえば、魔物の群れに遭遇した記憶はある。馬車が一緒だったかは……悪い。そこまでは、覚えていない」

「！」

「早くおまえに会いたくて急いでいたのに邪魔をされたからな、よく覚えている。それに売られた喧嘩は……、ディアナ？」

「やはり……、やはりアレス様だったのですね……！」

こみ上げてくる想いが、彼女の翠瞳から煌きとなって流れ落ちる。

「ディ、ディアナ……！？」

「何でも、何でもありません……！」

胸の前で手を組み小さくかぶりを振るディアナ。

それを見て、アレスは一つ息を吐くとこめかみを押さえる。

「だから、おまえさ……」

彼女を優しく抱きしめ、一呼吸置いた後に再び口を開く。

「嘘つくの、下手すぎなんだって」

あの時と、同じ台詞——。ディアナのエメラルドの瞳が細まった。溢れ出す、透明な雫たち。

「アレス様、私……」

「愛している、ディアナ」

「私も……。あの時からずっと、お慕い申し上げております」

アレスの腕が緩む。僅かに二人の間が空き、その中心で金と翠の瞳が交差した。

サラリ、彼女の髪を揺らしながら、アレスは彼女の濡れた頬を、そして彼女の肩に触れる。

熱に潤んだエメラルドに、蠱惑的に輝く唇に惹かれるように。  
再び、唇が重なった。



## 変わらないもの（後書き）

王子と姫の物語はまだ続きますが、一応、ここで完結です。  
お付き合い、ありがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5465p/>

---

プレリユード 『王子と姫の出会い』

2010年12月22日05時25分発行